
人形師の挽歌

上総睦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人形師の挽歌

【Nコード】

N7400F

【作者名】

上総睦

【あらすじ】

時は仮想19世紀。場所はヨーロッパの薄汚れたスラム街。それは、一人の少年が出逢った物語。祖父から託された古びた人形と共に、そっと始まった、哀悼歌。

序章（前書き）

この小説はあくまでファンタジー小説です。時代考証などは全くしていませんので、その辺はご了承ください。

序章

くるりら

たらりら

しゃらりら

はらひら

音

汚と

鳩

破と

歌

有た

そんなものの中で

僕の

祖父の

人形が踊る

時に悲しく

時に美しく

幻想的で

現実的で

ヒュプノスと

タナトスと

その間を

閃くように舞う

開幕のベルは鳴った

微笑みと共に

高らかな銃声墮つ

一話ゝ旅立ちの人形

眩い光が、閉め忘れたカーテンの隙間から洩れる。いつの間にか、また、朝が来ていた。

脳裏に、金色の長い髪が、風に舞い踊る映像が焼きついて離れない。思い出そうとしているわけではないのに、しつこくこびりついている。

「」

自身を落ち着けようと呟いたはずの言葉は、何故だか音にならなかった。

驚いて咄嗟に喉に手を当てた。少しずつ喉に力を込めて、恐る恐る声を出そうと試みる。

あ、と無意味な音は、がらんとした部屋に空しく、しかし確かにそのまま耳に届いて、良かった、と安堵する。

寝起きだったからだろう、と半ば無理矢理ながら自らを納得させてベッドから降りた。

それにしても、あの夢は何だったのだろうか。

どこか、どこか僕の知らない遠い場所で、見ず知らずの男が立っていたのだった。

僕は彼であり、そして彼ではない誰かで。

男の容姿はどうだっただろうか。

そう、確か、スツ、と通った鼻は高く、片方の瞳は髪に隠れていたが、鋭く目の前の景色を見据えるアイボリーは深く、しかし和やかで、俗に言う、美形、という感じだった。陶磁器のような肌は赤い光に照らされて、一つ一つの動作がまるで作り物のように思えた。

男の後方には、赤い髪を左右にはねさせた年幼き少女がいて、強情そうな瞳は爛々と輝いていて、僕なんかよりずっと強そうな感じ

がした。

ハッキリ言つて、不釣合いな2人組でしかない。

どこをどうとつても親子にも、兄弟にも見えはしないし、恋人と
いうには一切の甘さを含まない雰囲気だ。

そんな場所に僕は、浮遊するような不確かさで漂っている…。

そこで僕は無意味な回想を振り払つた。

あれは、夢だ。夢でしかない。単なる夢なんだ。何の意味がある
わけではないし、深く追求する必要もない。

どこぞの夢占いを専門とする者であれば、この夢はどのような
と長つたらしく講釈でもしてくれるのかもしれないが、生憎そんな
知り合いもないし、金もない僕には関係のないことだ。

パシ、と両頬を軽く叩くと、幾分目が覚めたような気がして、パ
ジャマ代わりの綿の衣類を脱ぎ捨てた。

ハンガーにかかつていた麻のシャツを手にとつて、日の光に翳す。
所々に入つた金糸による刺繍は、程よく細かく豪華で、しかし嫌
味なほどではなくて、仕事着として重宝している。

さあ、仕事だ。今日も一日が始まる。

商売道具が入つた木製の小箱と、静かに佇む古びた人形を小脇に
抱えて、曇つた鏡に自らを映してぼさぼさの髪をおざなりに整えた。
外の空気は意外に冷たくて、夏の終わりを予感させた。

いつもはただただ輝くだけの太陽も、やけに大人しく感じて、今
日は早めに終わろうかと、まだ始まつてすらいなない報われない商売
を憂慮する。

パタン、と乾いた音を立てて扉は閉まつた。軋んだ蝶番の音はま
だ耳に痛い。

ポケットから鍵を取り出して、そんな物は必要無いんだつた…、
と一人だけの空間で、誰にアピールするわけでもないのに苦笑して
みる。

この街では、貴重品は自分の身につけているのが最も安全な方法

だ。

下手に鍵なんかして家を出ると、何か高価なものを持っているんじゃないか、と無様なハイエナどもに狙われて、荒らされて、金目のものだけ奪われるのが関の山で、来たばかりの奴は大抵これで失敗する。

勿論、人のことは言えないのだけれど。

小さく溜息をつくと、一般人街とスラム街の丁度境目にある、細い裏通りの暗い角に、僕はいつも通りに歩いていった。そこまでは全くもっていつもと同じだった。同じであった。

二話　旅立ちの人形

昼にもかかわらず薄暗い路地裏に、小さく細く日の光が差し込んでわずかに僕たちを照らしている。

また今日も客など気はしないのだろう。

今月は何人来てくれたのだったろうか。いやまず、今日が何日かを僕は知らないじゃないか。

日にちなどこの生活には何の関係もない物で、日が出て闇が迫り、昼と夜さえわかれば僕は何不自由なく生きていける。

皆誰しもそうだろうと思うのだけど、人々は暦というものに縋っている。

時間に追われて生きる者が大半なのだから、異端なのはやはりこんな場所で薄汚く這い蹲っている自分達の方なんだろう。

ここから一步でも出れば喧騒が広がっているけれど、少しでも裏通りに入りさえすれば、そこは静寂の海で、こんな行方のない物思いをするにはもってこいなのだ。

ひゅう、と一陣の風が吹いて並べられた商売品が小さく音を立てて倒れた。

その細工物を元の場所に緩慢に戻す。

手にしたそれはフルーレをモチーフにしたブローチで、自分としてはそれなりに上手くいったと感じられる作品だった。

こうして並んでいる品は僕が全て作ったもので、今は亡き祖父の今は無き祖国に伝わる伝統工芸品を自分なりに工夫して身につけやすくしたものだ。

祖父の遺品として大量に残されたコレクションには到底及ぶべくもないが、口下手な叔父から、素晴らしい、という賛辞をもらったこともあった。

彼はここよりも東の方で商売をしていて、その手のものには多少目が利いた。

もしかしたら甥っ子への少々過ぎたお世辞であつたのかもしれないが、そんな言葉を抛り所にして未だに僕はこんなものを作り続けている。

食事や住居だって満足ではないし、いつどうなるかなんていう先も見えない貧しい生活ではあるが、自分なりに楽しんで生きている。時折、どうしようもなく一人で居ることを寂しく思うこともある。そんなときに思い浮かべるのは、僕を一番に可愛がってくれた祖父の姿で、あの大きくて暖かな手と腕を、きつと忘れることはないだろう。

豪快な笑い声はまだ耳に残っているし、僕に繰り返し言い聞かせた約束事も、物語も、祖国の思い出話も、何一つ忘れていないし、反芻した回数も今や数え切れないほどだ。

ここまでこれたのは、きつと、祖父との思い出だった。

高く高く遠く果てしない空の向こう側に、あの人はいるのだろうか。

広く広く遠く広がった地平の向こうに、あの人は眠っているのだろうか。

知る術はないけれど、もう少し、もう少し自由になったら、墓参りにでも行くべきだろうな。

祖父が、宝物なのだ、と、とても大切にしていた古びた人形は、今は僕の隣にあって、僕と共に生きている。

悲しくはない筈なのに、こんな日常の懐古で、僕は泣いた。

いつの間にか日は傾いて、忙しなく動く人影が多くなってきた。

白い街はいつの間にか赤く染まり、燃えるような風景に包まれる。こんなに紅くなるのは久しぶりだと立ち上がって通りから顔を出す、そこには、夕日と同じくらいに赤い髪を持った少女が立っていた。

驚きのあまり絶句した。不審な目で見られている。

慌てて取り繕おうと必死の営業スマイルを見せると、心底嫌そうな顔をされて少しだけ傷ついた。

「ねえ」

その声はよく通るメッゾソプラノで。

その瞳は陽に煌くピジョンブラッドで。

強い既視感が襲った。

僕は、この子に、会ったこと、が、ある…？

「泣いてたの？」

一瞬で顔が熱く火照る。

いや、見られていたってことはないだろう、じゃあ何で、ええ？
目を白黒させていた僕の姿を見て、少女は唇の端を少し上げて笑った。

それは少し嘲笑にも似たものだったけれども、何やら様になって見えて僕は感心にも似た思いを抱いていた。

「だって…鼻が赤いじゃない」

思わず花を押さえると少女は、それと目元も、と言って今度は本当に可笑しそうに笑った。

照れ隠しに首筋に手をやったが、所在無げに揺らすことしかできなくて何の解決にもならなかった。

「夕日の所為じゃ、ないかな」

「へえ、どうだろ？」

小首を傾げて可愛らしく尋ねる姿も、とても似合っているのだけど、その瞳の中にからかいの色を見つけて少し僕は面白くなかった。
「君は、こんなところで何してるのさ？」

そう問うと僕をじいっと見つめて、今度は蠱惑的な笑みを。

本当に色々な表情をする子だな、と僕は心のどこかで漫然とした思いを持った。

「貴方を、待ってたの」

まるで幼子に言い聞かせるように優しく、そして男共を誘惑するように艶かく、有無を言わせない強さを持って、彼女は言った。
そこで僕は気がついた。

彼女は、あの夢の登場人物だった、と。

二話〱旅立ちの人形（後書き）

お読みくださり有難う御座います。
続きは気長にお待ち下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7400f/>

人形師の挽歌

2010年11月24日05時32分発行